

ダニエル書12章5-13節 「いつ終わるのか？」

1A 聖なる民の力 5-7

2A 終わりの姿 8-13

1B 賢明な者の悟り 8-10

2B 耐え忍ぶ日数 11-12

3B ダニエルの終わり 13

本文

ダニエル書 12 章を開いてください、私たちはついに、ダニエル書を完読します！ 今晩は 5 節からですが、話しは 4 節の続きになっています。反キリストが大いなる戦の中で、ユダヤ人をこれまででないほどに大迫害を加えるのですが、天使長ミカエルが彼らのために戦い、また主ご自身が戻って来られ、彼らを救い出されます。そして、すでに死んでしまった者たちが、よみがえり、反逆者は永遠の嫌悪に至りますが、賢明な者たちは永遠のいのちに至ります。大空のように輝き、人々を義に導いた者は、世々限りなく、星のようになるという約束ですね。

ところが 4 節で、これらのことは秘めておきなさい、この真理の書は封じられているからだ、と確認しているのです。「ダニエルよ。あなたは終わりの時まで、このことばを秘めておき、この書を封じておけ。多くの者は知識を増そうと捜し回る。」

この封印される書物についてですが、背景として、公的な文書があります。エレミヤ書 32 章の話が、その理解の助けになります。エレミヤには、バビロンがエルサレムを攻め、ここを破壊し、バビロンの支配になることが示されていました。ところが、彼のいとこが来て、自分の父の畑を買い取ってくれないかと頼みに来るのです。モーセの律法には、貧しくなって土地を売り渡さないといけなくなったら、近親者が代わりに買い取って、土地を失わないようにするという掟があります。それで、彼は買い取りました。「32:9-15 そこで私は、おじの子ハナムエルから、アナトテにある畑を買い取り、彼に銀十七シケルを払った。10 私は証書に署名して封印し、証人を立てて、秤で銀を量った。11 そして、命令と規則にしたがって、封印された購入証書と封印のない証書を取り、12 おじの子ハナムエルと、購入証書に署名した証人たちと、監視の庭に座しているすべてのユダの人々の前で、購入証書をマフセヤの子ネリヤの子バルクに渡し、13 彼らの前でバルクに命じた。14 『イスラエルの神、万軍の【主】はこう言われる。これらの証書、すなわち封印されたこの購入証書と、封印のない証書を取って土の器の中に入れ、これを長い間、保存せよ。15 なぜなら——イスラエルの神、万軍の【主】はこう言われる——再びこの地で、家や、畑や、ぶどう畑が買われるようになるからだ。』」エレミヤは、そう宣言しながら、どうして、これからバビロンに奪い取られるこの土地を、今、買い取らなければならないのか？ という訴えを主にに行います。彼自身、信仰によ

って買い取ったことがわかります。

この手続きに注目してください。買い取った証書に署名して封印します。証人を立てています。そして、それが一定の期間が過ぎるまで、必ずこの証書は有効であることを保証するのです。これが、主の使いが真理の書を封じていることの背景です。これから、他の御使いも出てきますが、他の御使いが証人に加わって、それで、このことは終わりの定められた時が来るまで封じられているけれども、必ずこれらのことは起こることを確認しているのです。封をすることで、これは公式の文書であり、絶対にこの取引は行われるという保証です。ですから、これらのことは必ず起こるのです。ただ、終わりの日に近づくとつれて、多くの者たちがいったいどういうことなのか、知識を増そうと捜し回ります。

私たちには、これらのことが本当に起こるのであろうか？と疑ってしまうと思います。主が語られていることが、夢物語のように見えるので、本当に起こるのか？と思います。

1A 聖なる民の力 5-7

⁵ 私ダニエルが見ていると、見よ、二人の人が立っていた。一人は川のこちら岸に、もう一人は川の向こう岸にいた。⁶ その一人が、川の水の上にいる、あの亜麻布の衣を着た人に言った。「この不思議なことは、いつになると終わるのですか。」

ダニエルが、ティグリス川の岸にいたことを思い出してください(10:4)。そこで、主イエスご自身ではないかと思われる、主の使いが神の栄光の輝きをもって現れました。そして、その他にも御使いたちがダニエルに語っているであろう感じでした。すべてのことを語り、その書を封じる時には、今、話しましたように、二人の御使いがいます。一人はこちら側に、もう一人は川向うにいます。彼らは、10章に出てきた他の御使いたちなのかもしれません。そして、川の上に、「あの亜麻布の衣を着た人」がいます。「あの」と言っていますから、すでにダニエルが見た方です。主イエスではないかと思われる方です(10:5 参照)。

その書が封じられた後で、御使いの一人が、主の使いに尋ねるのです。「この不思議なことは、いつになると終わるのですか。」御使いにとっても、あまりにも理解を超える出来事であり、そして、いつになると終わるのか？と気になっています。これらの苦難は、いつになれば終わるのか？と。エレミヤは、バビロン捕囚は七十年であると告げられていて、終わりは七十年が満ちたら、ということが分かっていました。この書については、どうなのか？と御使いは尋ねているのです。これは私たちの願いでもありますね、試練や苦しみがある時には、「いつになったら終わるのだろうか？」とあって、嘆きます。

⁷ すると私は、川の水の上にいる、あの亜麻布の衣を着た人が語るのを聞いた。彼はその右手と

左手を天に向けて上げ、永遠に生きる方にかけて誓った。「それは、一時と二時と半時である。聖なる民の力を打ち砕くことが終わるとき、これらすべてのことが成就する。」

天に手を上げるのは誓いを立てる行為です。申命記 32 章 40 節に「わたしは誓って言う。『わたしは永遠に生きる。』」とあります。だからこれは必ず起こることです。この手を挙げる天の使いの姿は、黙示録 10 章において認めることができます。

1 また私は、もう一人の強い御使いが、雲に包まれて天から下って来るのを見た。その頭上には虹があり、その顔は太陽のよう、その足は火の柱のようで、2 手には開かれた小さな巻物を持っていた。御使いは右足を海の上、左足を地の上に置いて、3 獅子が吼えるように大声で叫んだ。彼が叫んだとき、七つの雷がそれぞれの声を発した。4 七つの雷が語ったとき、私は書き留めようとした。すると、天からの声がこう言うのを聞いた。「七つの雷が語ったことは封じておけ。それを書き記すな。」

この姿は、まさにダニエル 10 章に出てくる、亜麻布を着た方のように見えるし、また黙示録 1 章に出てくる、イエス・キリストの栄光に輝くお姿にも見えます。ここでの最も大きな特徴は、「手には開かれた小さな巻物を持っていた」というところです。ダニエル書にある真理の書は封じられていました。けれども、今や、子羊イエスによって、七つの封印が解かれて、開かれた書物になっているのです。そして、続きを読みましょう。

5 それから、海の上と地の上に立っているのを私が見たあの御使いは、右手を天に上げ、6 天とその中にあるもの、地とその中にあるもの、海とその中にあるものを造って、世々限りなく生きておられる方にかけて誓った。「もはや時は残されておらず、7 第七の御使いが吹こうとしているラッパの音が響くその日に、神の奥義は、神がご自分のしもべである預言者たちに告げたとおりに実現する。」

ここでも手を上に挙げて、誓っています。両手ではなく右手のみですが、なぜなら、左手には、開かれた巻物を持っているからです。そして、「神がご自分のしもべである預言者たちに告げたとおりに実現する」と宣言しています。そうです。ダニエルの預言が、次々と実現するのだと言っています。ダニエルの時に封じられた書は、今、そこに書かれていることが実行に移されると宣言しているのです。

その時は、「一時と二時と半時」です。すでにダニエル書 7 章でこの期間が出てきました。「7:25 いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを悩ます。彼は時と法則を変えようとする。聖徒たちは、一時と二時と半時の間、彼の手に委ねられる。」とあります。これが 9 章 27 節には、第七十週目の後半の「半週」なのです。三年半という期間です。そして黙示録にも数多く出てきま

す。ある時は 1260 日であり、またある時は 42 ヶ月です。この三年半という期間を、神はご自分に誓って定めておられるのです。

反キリストの手にゆだねられて、激しい迫害を受けるその大患難の 때가、ここ 7 節では「聖なる民の力を打ち砕く」とあります。この「力」は、彼らの生きようとする力です。自分たちの行ないによって生きようとする力です。パウロは、ローマ人への手紙の中で上手に論じました。なぜユダヤ人がキリストを拒んで、むしろ異邦人が受け入れたのか？なぜ熱心にメシヤを待ち望むユダヤ人がメシヤを見失って、特段に探し回っていなかった異邦人が見出したのか。こう説明しています。「ロマ 9:30-32 それでは、どのように言うべきでしょうか。義を追い求めなかった異邦人が義を、すなわち、信仰による義を得ました。31 しかし、イスラエルは、義の律法を追い求めていたのに、その律法に到達しませんでした。32 なぜでしょうか。信仰によってではなく、行いによるかのように追い求めたからです。彼らは、つまずきの石につまずいたのです。」

信仰をもって神の義をイスラエル人がわきまえなかったからです。人は完全に墮落しており、自分の内には何も良いものがないことを知り、だから神ご自身が与えられる義、キリストにある義をただ信じて、受け入れることによってのみ、義と認められるのだという知識に至らなかったのです

これはユダヤ人の問題だけではなく、多くの異邦人も同じです。自分の行ないによって何とか救いを得ようとする人々には、キリストはつまずきの石となります。ユダヤ人は、自分たちで何とか救おうという強い意志があります。出エジプトから始まる生存の危機は今に至るまで続いています。イスラエルまた離散の国々における彼らの行動の根底には「生き残り」があります。これが分かると、イスラエルの行動様式が分かると、ある人が教えてくれました。神が、そうした彼らの働きの中で恵みを働かせて、今に至るまで、彼らが滅びないでいるようにしておられます。

しかし、そのままでは根本的には、神の義に到達することはできないのです。神が永遠の昔から定めておられるのは、信仰の原理です。そこで神は彼らのその力を砕かれます。ちょうどエサウに会うのを恐れて神と格闘したヤコブのように、その力を打ち砕かなければならないのです。弱くされることによって、初めて神が彼らを救い、祝福を与えることがおできになります。

そのための大患難です。大患難はこの地上の不義に対する神の怒りの現われですが、イスラエル人にとっては、彼らの力が打ち砕かれる時です。絶対の窮地に立たされる時に、彼らは初めてメシヤを求めます。その救い出してくださる方が、かつて自分たちの先祖が刺し殺した、イエスご自身であること知ります。「ゼカ 12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと嘆願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように、その者のために激しく泣く。」

そして、私たちがよく知る、イエス様の十字架の預言、罪のための身代わりの死についての預言ですが、文脈を見ますと、驚くべきことがわかります。それは、イスラエルの残された民が、主イエスの再臨を見て、それで告白している箇所なのです。52章13節から読んでみます。

13「見よ、わたしのしもべは栄える。彼は高められて上げられ、きわめて高くなる。14 多くの者があなたを見て驚き恐れたように、その顔だちは損なわれて人のようではなく、その姿も人の子らとは違っていた。15 そのように、彼は多くの国々に血を振りまく。王たちは彼の前で口をつぐむ。彼らが告げられていないことを見、聞いたこともないことを悟るからだ。」

主が戻って来られる時に、国々の王は口をつぐみます。まさかという驚きです。顔立ちが損なわれているのです。イエス様が、十字架の時の傷を背負って、戻って来られているからです。そして、53章1節は、こう続きます。

1 私たちが聞いたことを、だれが信じたか。【主】の御腕はだれに現れたか。2 彼は主の前に、ひこばえのように生え出た。砂漠の地から出た根のように。彼には見るべき姿も輝きもなく、私たちが慕うような見栄えもない。3 彼は蔑まれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で、病を知っていた。人が顔を背けるほど蔑まれ、私たちも彼を尊ばなかった。

1節の「主の御腕」とは、出エジプトの時の、主の力強い腕のことです。ここはメシアご自身の呼び名になっています。イスラエルの民を力強い腕で救われた方は、実は、見るべき姿のない、のけものにされ、悲しみの方なのだ、と告白しているのです。こうして、イスラエルの残りの民は、自分たちの力が砕かれ、この方の救いにあずかりません。これはユダヤ人だけでなく私たちみながそうです。いつになったら、私たちは自分たちの生きる力が打ち砕かれるのでしょうか。自分が自分を生かそうとする力が砕かれた時に初めて、キリストのみによる救いを体験することができます。

2A 終わりの姿 8-13

1B 賢明な者の悟り 8-10

⁸ 私はこれを聞いたが、理解することができなかった。そこで私は尋ねた。「わが主よ、この終わりはどうなるのでしょうか。」⁹ 彼は言った。「ダニエルよ、行け。このことばは終わりの時まで秘められ、封じられているからだ。」

ダニエルは、ここまでのことを悟ることができませんでした。いつまでなのか？という御使いの問いに対しては、一時、二時、半時という答えがありましたが、その終わりはどのようなものなのか？が分からないでいます。そこで、先に告げられたように、主の使いは、「終わりの時まで秘められ、封じられているからだ」と答えています。

このように、御使いたちも、預言者たちも知りたいと願っているのですが、使徒ペテロが説明しています。ペテロ第一 1 章です。

10 この救いについては、あなたがたに対する恵みを預言した預言者たちも、熱心に尋ね求め、細かく調べました。11 彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光を前もって証したときに、だれを、そしてどの時を指して言われたのかを調べたのです。12 彼らは、自分たちのためではなく、あなたがたのために奉仕しているのだという啓示を受けました。そして彼らが調べたことが今や、天から遣わされた聖霊により福音を語った人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。御使いたちもそれをはっきり見たいと願っています。

キリストの苦難があり、そしてキリストに連なる者たちに苦しみがあるけれども、それは自分たちの主に倣っているのだ、ということをペテロは、第一の手紙で話しています。ユダヤ人は、自分たちが苦しむことは分かっていますが、自分たちのメシアご自身が苦しみを受けるということは、あまりにも信じがたいことだったでしょう。ダニエルも、ここの部分が秘められていたのです。けれども、9 章で、油注がれた者は断たれるという預言も行っており、知らされていたけれども、だれのことか、どの時を指しているのか調べ、自分たちのことではなく、後の人々のことだと知らされていたのです。それが、ここの箇所、終わりの時に開かれる書物なのだということです。

¹⁰ 多くの者は身を清めて白くし、そうして錬られる。悪しき者どもは悪を行い、悪しき者どものだれも理解することがない。しかし、賢明な者たちは理解する。

アンティオコス・エピファネスによる迫害の時、神につくもの者たちと、ギリシア宗教の中にどっぷり漬かるユダヤ人たちに真二つに分かれました。主を知り、そこに堅く立つと、ますます清められ、練られます。一度、自分が神に従うというベクトル(方向性)を持つと、主の御霊がその人のうちに働かれて、ますます清めを経験することができるからです。けれども、一度、この世を愛するというベクトルを持つと、ますますこの世の汚れの中に入っていくこととなります。初めは対した距離が離れていないけれども、どんどんその差が大きくなっていくのです。

そして終わりの日には、そのことが明らかになります。黙示録の終わりにも御使いがこう話しています。「黙 22:10-11 また私に言った。「この書の預言のことばを封じてはなりません。時が近いからです。11 不正を行う者には、ますます不正を行わせ、汚れた者は、ますます汚れた者とならせなさい。正しい者には、ますます正しいことを行わせ、聖なる者は、ますます聖なる者とならせなさい。」終わりの日には、中間でいることはできなくなるのです。

そして、そのように身を清め、ますます練られる人々には、理解が与えられることを教えています。「賢明な者たちは理解する」とあります。ここで大事なのは、理解するということが、その知恵が、

人々の清めと関係があるということです。私たちは、平日の学びでダニエル書の前に、ヨハネ第一を学びましたが、そこでは、霊知と呼ばれているもの、グノーシス系の異端の教えに対して、ヨハネが警告を与えている内容でした。彼らは、人々には知らされていない、霊的な知識が自分たちには与えられているとしたのです。そして、キリストが肉体を取って現れているということも否定しました。けれども、キリストは肉体を持って現れ、その肉体のおける苦しみもあって、それで真実な知識となります。私たちが、試練を受けて、清められる中で、知恵が与えられ、キリストを知ることができます。ヤコブ書 1 章では、試練を受けることで、忍耐を働かせ、完全な人となれる。そして、知恵に欠けていると思うならば、惜しみなく施して下さる神に願いなさいと、ヤコブは勧めています。こうやって、真の知識、キリストの知識に至るのです。

そして、イエス様は、イエス様が喩えを話された時、「耳のある者は聞きなさい。(マタイ 13:9)」と言われました。黙示録の七つの教会に対しても、主は、「耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。(3:6)」と言われました。分かる人には分かるのです。分からない人には何のことかさっぱり分からないのです。私たちが、その霊の耳を持っているかどうかであります。

2B 耐え忍ぶ日数 11-12

¹¹ 常供のささげ物が取り払われ、荒らす忌まわしいものが据えられる時から、千二百九十日がある。¹² 幸いなことよ。忍んで待ち、千三百三十五日に達する者は。

亜麻布を着た方は、ガブリエルが先に伝えていた幻のことを話しておられます。ダニエルが、聖なる都エルサレムと、同胞の民ユダヤ人のために執り成しの祈りを献げていました。その時に、エルサレムを再建せよという命令が出てから、七十週が定められていて、その期間が満ちれば、咎は取り除かれ、義が確立し、聖所には油が注がれ、預言が成就します。けれども、七週また六十二週の後、油注がれた方、メシアが来たのに、この方は断ち切られてしまいます。そこで、来るべく君主の民、すなわちローマが聖所と都を破壊します。そして、洪水、すなわち軍隊が押し寄せて、エルサレムには荒廃が続きます。

それから、9 章 27 節ですが、「彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる。忌まわしいものの翼の上に、荒らす者が現れる。そしてついには、定められた破滅が、荒らす者の上に降りかかる。」ここの最後の週、第七十週目に、今、亜麻布を着た方が注目させているのです。七年間ですが、その半ばになると、第四の獣から出てくる君主、つまり反キリストが、常供のささげ物をやめさせます。そして、荒らす忌まわしいものを据えます。かつて、アンティオコス・エピファネスは、ゼウス神を神殿の敷地に据えて、豚のいけにえを祭壇に献げさせました。反キリストは、聖所の中に入り、自分こそが神であると宣言します。そして、偽預言者が、彼の像を造り、それを全住民に拝むように強要します。

それで、イエス様が言われた、「マタ24:21 そのときには、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難があるからです。」が起こります。そして、次に、日数を少なくして下さるという約束を言われます。「24:22 もしその日数が少なくされないなら、一人も救われまいでしょう。しかし、選ばれた者たちのために、その日数は少なくされます。」この日数というのが、ここにある日数です。それは、荒らす忌まわしいものが据えられてから 1290 日であり、1335 日まで耐え忍ぶ必要がある、というものです。

「一時と二時と半時」というのは、三年半のことですが、当時の一年は 360 日です。それで数えると、1260 日です。黙示録にも出てくる日数です。ですから、1290 日というのは、さらに 30 日多い日数となります。1335 日は、それに加えて 45 日多い日数です。この合計 75 日間はいったい何なのでしょう？ おそらくは、主キリストがこの地に再臨されて、それから千年王国を建てられるまでの暫定期間であろうと考えられます。

まず 11 節の空白の 30 日間を考えてみたいと思います。初めの 1290 日後であります、イエス様が地上に戻って来られて、この像が取り除かれるまでに 30 日があると思われれます。イエス様が来られて、反キリストが火と硫黄の池に投げ込まれて、それから千年間の統治をこの地で始められます。そして 9 章で学んだように、主は「至聖所に油そそぎを行う」とあります(24 節)。つまり新しく神殿を建てられ、その至聖所に油注がれるのです。その神殿については、既にエゼキエル書 40 章以降にあります。したがって、イエス様が反キリストを滅ぼされてから、神殿を建てるためにその荒らす忌むべき像が取り除かれるまで時間差がありそれが 30 日であろうと考えられます。

そして 12 節の残り 45 日ですが、主は御国の中に入る者たちを選び分けられます。大患難において数多くの方が死ぬのですが、それでも生き残っている者たちがいます。ヨエルは、その国々が裁かれることを預言しています。「ヨエ 3:1-3 「見よ。わたしがユダとエルサレムを回復させるその日、その時、2 わたしはすべての国々を集め、彼らをヨシャファテの谷に連れ下り、わたしの民、わたしのゆずりイスラエルのために、そこで彼らをさばく。彼らはわたしの民を国々の間に散らし、わたしの地を自分たちの間で分配したのだ。3 彼らはわたしの民をくじ引きにし、少年を渡して、遊女を得、少女を売って、酒を得て飲んだ。」このヨシャバテの谷は、ケデロンの谷の一部で、オリーブの山と神殿の丘の間の部分を指します。そのことを、イエス様はオリーブ山で弟子たちに話されました。あの「羊と山羊」の話です。「マタ 25:31-33 人の子は、その栄光を帯びてすべての御使いたちを伴って来るとき、その栄光の座に着きます。32 そして、すべての国の人々が御前に集められます。人の子は、羊飼いが羊をやぎからより分けるように彼らをより分け、33 羊を自分の右に、やぎを左に置きます。」そして、「わたしの兄弟たち(40 節)」すなわち肉の兄弟であるユダヤ人たちに対して行なったことによって、御国に入ることができるかそうでないかを決定されます。

その他、悪魔が底知れぬ所に鎖につながれること、大患難で殉教した人々を復活されること、ま

た世界中から選ばれた民、ユダヤ人がイスラエルに集められること(マタイ 24:31)など、千年間の統治の前に行なわなければならないことは沢山あります。そのための 30 日間と 45 日間であると言えます。

このようにして、そこまでの日、忍耐するということが幸いであるということをお話しています。一時、二時、半時が終わっても、荒らす忌むべきものが取り除かれる期間があります。さらにその他の事柄があります。最後まで耐え忍ぶ時に御国にあずかれるのだということを教えています。私たちも、いつも最後まで耐え忍ぶことが求められていますね。「ヘブ 3:14 私たちはキリストにあずかる者となっているのです。もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば、です。」

3B ダニエルの終わり 13

そして最後、終わりはどのようになるのか、というダニエルの問いに対して、主の使いは、彼個人の終わりについて約束をくださいます。

¹³あなたは終わりまで歩み、休みに入れ。あなたは時の終わりに、あなたの割り当ての地に立つ。」

ここまで神に仕え、知恵をもって王に仕えてきたダニエルです。異邦人の王に仕えながら、祖国イスラエルと同胞の民のために祈り続けたダニエルです。彼はもう 90 歳ぐらいのおじいさんです。だからイスラエルの地に帰ることはできません。そのダニエルに対して主が、彼個人に約束を与えておられます。それは彼自身の復活です。「**休みに入れ**」というのは肉体の死のことです。陰府に下ることです。けれども、終わりの日には復活して、そして主がイスラエルに与えてくださる割り当て地に立つことができます。たとえ約束を生きているうちに得なかったとしても、主は必ず後の日にかなえてくださいます。

ダニエルはなんという偉大な人であるか、と私は思います。自分のことは全て横において、友人のために、王のために、そしてユダヤ人のために祈ってきたダニエルです。最後の最後に、自分個人に対する慰めを得ました。ヨシュアもそうでしたが、割り当て地を全てのイスラエルのために定めてから、自分自身の町を与えられました(ヨシュア 19:49)。そしてダニエルこそ「**賢明な者**」でした。知恵を持って生きました。私たちも、賢明さを主に求めましょう。